

古事記を読む会 22号 (2016, 6, 10)

北陸は入梅前、過ごしやすい陽気が続いています。日も長くなり、有意義な楽しい時間を過ごされていると存じます。

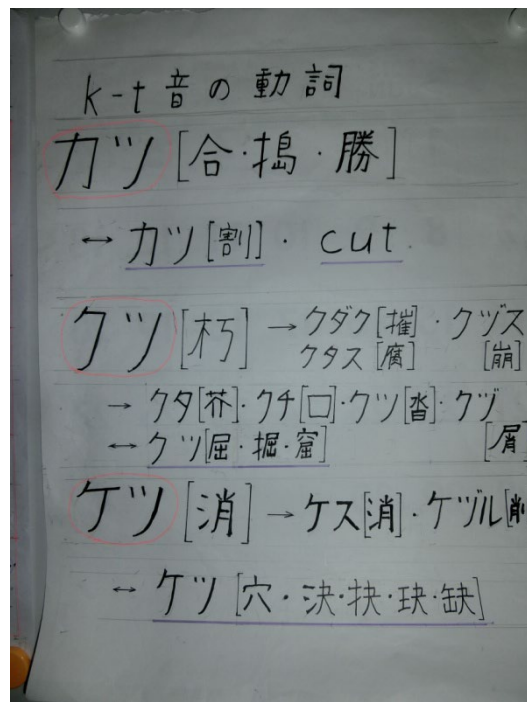
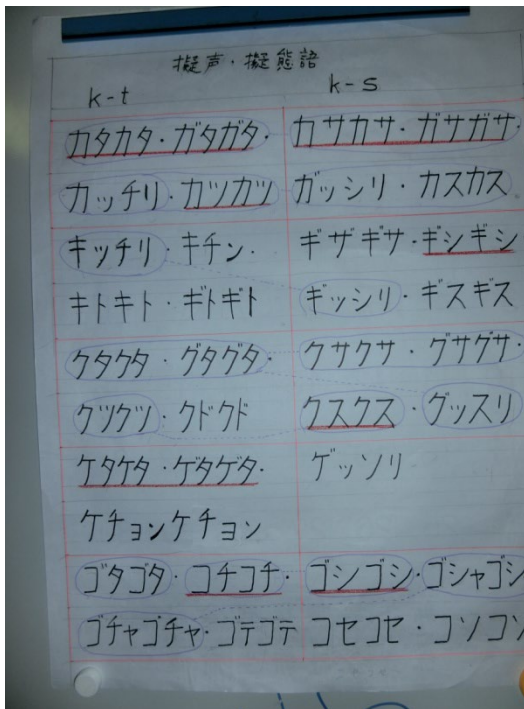
さて、9月の古事記を読む会の講師講演会に、呉羽地区に在住の鷲本義昌様に講師をお願いしました。市民大学で講師を勤めて居られます。7月には参観される予定です。

今回は、五十嵐顕房さんと近藤さんの提案を盛り込んで古事記を読みたいと思います。

【前回の流れ】

K-t 音語と k-s 音語 系譜

カツラ〔香木〕と キサ貝によせて・・・ と題し、イズミオキナガさんにお話しいただきました。〔資料参照〕



手書き資料の準備もしていただきました。カ・ツラ or カツ・ラ
「カツ」「クツ」「ケツ」について、同じ音の漢字を挙げ、共通点を探られた。
かつ→cut と考え、いろいろなバリエーションを考える。

カチワル→勝つ カットしたものが「クツ」になる。「ツ」は「ス」に変わる傾向にある。「カス」となり、カス。(滓) 自分のものをcutして貸

す。ことにもなる。

「カズガ」春の日 春の太陽光線が地面に食い込むと光線がかつかる。

「ケツ」 (穴、決、 袂、 欽 決)

穴 : cutされた姿、 決 : 波が岸辺をcutする。川が氾濫決壊。

甲種の「コ」越 と乙種の「コ」腰 等発音が違うことなどにも触れていただきました。

イズミさんのお話を伺うと、日本独特と思う言葉が、実は英語や漢語等と並び、言葉のおこりの感覚に世界共通のものが感じられ楽しくなります。

多くの言葉を抜き出しその検討をつぶさにされるイズミさんに拍手です。

5月19日(土) 日本歌謡学会春季大会 公開講演会に参加する。

於 高岡氏万葉歴史館 地階講義室 午後1時半より

1、歌謡と万葉歌 坂本信幸館長

2、天皇の大御葬に歌う歌—倭建命から明治天皇へ 藤原享和
立命館大学 教授

☆公開講演会のあと、「万葉と古代歌謡」という歴史館の展示について案内して頂く。今回の展示企画者である関隆司学芸員が、越後や能登などを舞台に(越の国の範囲に)旋頭歌らしき古歌謡があって、それを大伴家持が歌にしていることを興味深く紹介された。

万葉集に記された歌は、短歌・旋頭歌・長歌等いろいろある。そして、作者は家持や読み人知らず等、人が作ったという感覚があったが、土地に残されていた歌が土台にあったことを初めて知った。すると、古事記に残された歌との比較などもおもしろいのか?という感想をもった。

参考

巻第16 3878

能登国の歌三首 梯立の 熊木のやらに 新羅斧 落とし入れ わし
あげてあげて な泣きそね 浮き出づるやと 見む わし

右の歌 一首、伝えていわく、或る愚人あり、斧海の底に墮ちて、
鉄の沈み水に浮く理なきを解(し)らず。聊かにこの歌を作り、口吟(うた)
ひてさとすと為す、といふ。(小学館 万葉集4 より)